洋１３－１０

「マーサ、あるいはマーシー・メイ」　❄❄❄❄

２０１３（平成２５）年１月１５日鑑賞<シネマート心斎橋>

監督：ショーン・ダーキン
マーサ／エリザベス・オルセン
パトリック（カルト集団のリーダー）／ジョン・ホークス
ルーシー（マーサの姉）／サラ・ポールソン
テッド（ルーシーの夫、マーサの義兄）／ヒュー・ダンシー
マックス／クリストファー・アボット
ワッツ／ブラディ・コーベット
ゾーイ／ルイーザ・クラウゼ
２０１１年・アメリカ映画・１０２分
配給／エスピーオー

<新しい才能と新しいミューズに注目！>

本作では何よりも２０１１年サンダンス映画祭で監督賞を受賞した２９歳の新人監督ショーン・ダーキンの才能と、ドラマ『フルハウス』のオルセン姉妹を姉に持ちながら、セレブ生活を離れＮＹＵで舞台を学んでいたという２２歳の新人女優エリザベス・オルセンという新しいミューズに注目！私は去る１月１２日に中国第６世代監督の旗手である賈樟柯（ジャ・ジャンクー）のデビュー作『一瞬の夢（小武／Ｘｉａｏ　Ｗｕ）』（９７年）と第２作『プラットホーム（站台／Ｐｌａｔｆｏｒｍ）』（００年）を続けて鑑賞した。テーマは２作とも、変わりゆく時代とその時代を生きる若者たちをジャ・ジャンクー監督の感性で切りとったもの。当時としてそれは新鮮だったはずだが、今では少し陳腐な感も。

邦画はテレビドラマや原作モノが氾濫し、ハリウッド映画もアメコミやシリーズものに席巻されているため、今は野心的、冒険的、革新的な映画に出会うチャンスが少なくなっているが、まさに本作は今ドキ貴重なそれ。本作のキャッチコピーは「『ブラック・スワン』のスタジオが再び仕掛ける衝撃的サスペンス！心の闇に葬ったもう一人のワタシが私を狂わせてゆく」というものだが、本作のタイトルはまさにそれだ。エリザベス・オルセン扮するマーサは、パトリック（ジョン・ホークス）率いる新興カルト集団に参加するまでは普通の女の子だったが、パトリックから「マーシー・メイ」という新しい名前（これはオウム真理教で言えば、ホーリーネーム）をもらった後は次第に１つの人格がマーサとマーシー・メイの２つに分裂していくことに・・・。ああ、恐い恐い。あえて、そんな恐いテーマに挑戦した新人監督の下で、新星エリザベス・オルセンはいかなる演技を？

<自発的な脱走に成功！これなら・・・>

映画冒頭、山の中の農場らしきところで、数人（数十人？）の男女が共同生活を営んでいるシークエンスが映し出されるが、これがニューヨーク州北部、キャッツキルの山にある農場で、パトリック率いるカルト集団の本拠地らしい。次には、みんなが寝静まっている早朝、マーサがこの農場から一人脱走するシークエンスが描かれる。マーサが電話で連絡をとるシーンから、長い間マーサが家族と連絡をとっていなかったことが明らかになるが、結局、マーサはコネティカットの湖畔の貸別荘で２週間の休暇を過ごしている、結婚したばかりの姉ルーシー（サラ・ポールソン）とニューヨークで建築の仕事をしている義兄テッド（ヒュー・ダンシー）の別荘に転がりこむことに。

園子温監督の『愛のむきだし』（０８年）は後半からは、「ゼロ教会」という新興宗教団体との対決とヨーコの救出が大きなテーマになった（『シネマルーム２２』２７６頁参照）が、本作冒頭のようにマーサの自発的意思によってカルト集団から脱走することができれば、それで問題は解決？いやいや、本作を観ているとなかなかそうはいかないらしい。それは、一体なぜ？

<現在と過去が混在する中、さて自分は？>

日本のテレビドラマは途中でトイレに立ってもストーリーの理解にさしつかえがないように、とにかくわかりやすくつくられているし、テレビドラマの延長のような最近の「製作委員会方式」で作られた多くの邦画もそれは同じ。しかし、サンダンス映画祭で監督賞を受賞した本作は『一瞬の夢（小武／Ｘｉａｏ　Ｗｕ）』や『プラットホーム（站台／Ｐｌａｔｆｏｒｍ）』におけるジャ・ジャンクー監督のように、「作家性」が顕著で説明調を一切排除しているから、スクリーンに集中していなければストーリーやポイントがわからなくなってしまう。一つ一つのシークエンスの転換点の説明がないのも、ジャ・ジャンクー監督作品と同じだ。

本作は、姉夫婦の別荘で少しずつ社会復帰しようとするマーサと、カルト集団の中で過ごすマーシー・メイの姿を同時平行で描いていくから、少しわかりにくい。カルト集団の中で当初は新米だったマーシー・メイも１年近く経つと新しく入ってきた少女サラの教育係に任命されるなど大きく成長。また、かつて自分が教えられたとおり、「自分の“役割”を探して」と教えるマーシー・メイの姿を見ていると、カルト集団の中でそれなりに立派に成長していることがわかる。それに対して、姉夫婦の別荘に戻ってきたマーサは、急に素っ裸で湖の中に飛び込んで泳ぎ始めたり、夜中に眠れないからといってセックスの真っ最中の姉夫婦のベッドにもぐりこんできたり、とその行動は異常。カルト集団では当初強姦まがいの「浄めの儀式」もあったようだが、農業を中心とした自給自足を目指す男女混同の共同生活も悪いものではない・・・。本作を観ているとそんな感じもしてくるが、そりゃヤバイ、ヤバイ。マーサはカルト集団での過去をきちんと清算し、現在の自分を見つめ直さなければ・・・。

<加速する狂気を、エリザベス・オルセンが熱演！>

本作はそのタイトルどおり、姉夫婦の支援を受けて正常な生活に戻ろうとする少女マーサと、カルト集団のマインドコントロールにはまってしまったマーシー・メイを１人の女優が演じ分けなければならないから、大変。新人女優エリザベス・オルセンの存在感について、チラシでは「無防備な エロスを発散させ、少女のような愛らしさと大人の女の魅惑的な表情を見事に演じわけ全米各地の映画批評家協会賞を席巻」と表現し、また映画ライター、高橋諭治のレビュー「４つの“Ｍ”に引き裂かれた女性の恐怖と孤独」では、「あどけなさを残す愛くるしい貌立ちと、焦点の定まらない虚ろな瞳。豊満な肢体から匂い立つ無防備な色気」と讃えているが、まさにそのとおりだ。

姉夫婦のもとで過去を反省しながら更生に向かって努力しているのかと思っていたのに、意外にも反抗的な姿勢を見せたのは、親切に問いかける姉のルーシーに対して「私は教師でリーダーなんだから、指図しないで！」と怒鳴り返したとき。さらに、一家団らんの食事中に将来の生き方プランを聞いてきたテッドに対して、逆に「成功をモノや金で判断している。そんな生活は模範的な生き方じゃない」とムキになって反論したとき。そんなマーサの姿勢を見て、ルーシーがカンカンになったのは当然だ。

そして、マーサの狂気がピークになったのは、ホームパーティーの席でお酒を準備しているバーテンダーに対して示したマーサの激しい怒り。何かにとりつかれたように身体を痙攣させ、わめきちらすマーサの姿を見ていると、いくら優しいルーシーであっても妹を医療施設に入院させなければ、と考えたのは当然だ。マーサの白いドレス姿などを見ていると少し豊満すぎるのでは？という感じはあるものの、それは２２歳という年齢を考えれば仕方なし？本作での鮮烈なデビューによって、以降エリザベス・オルセンにはジェシカ・ラング共演の『ＴＨＥＲＥＳＥ　ＲＡＱＵＩＮ』（１２年）、ダコタ・ファニング共演の『ＶＥＲＹ　ＧＯＯＤ　ＧＩＲＬＳ』（１３年）、ダニエル・ラドクリフ共演の『ＫＩＬＬ　ＹＯＵＲ　ＤＡＲＬＩＮＧＳ』（１３年）や、スパイク・リーが監督する韓国映画『オールド・ボーイ』（０３年）のリメイクも待機中というから、すごいものだ。

<あなたはこのラストをどう解釈？>

本作冒頭に見る牧歌的な風景を見ていると、パトリック率いるこのカルト集団は一見、１９９５年に「地下鉄サリン事件」を起こしたオウム真理教のような反社会的な集団とは無縁と思えるが、ショーン・ダーキン監督は中盤以降、その反社会性を明らかにしていく。集団内部での自由恋愛（？）は許容範囲だとしても、他人の家に小石を投げその反応を伺いながら家の中に侵入していく彼らのやり口を見ていると、こりゃ明らかな犯罪。しかも、偶然家の人に発見されるや平気で殺人行為にまで及ぶのだから、こりゃムチャクチャだ。

そんなカルト集団がマーシー・メイの「脱走」をすんなり認めるはずはないから、マーサはルーシーの庇護の下で必死で彼らの追及から逃れなければならないのに、ルーシーやテッドと口論し、自分の存在場所を失ったマーサはある日ふと懐かしくなって（？）教団に電話をかけたから最悪。途中でやっぱりこりゃマズイと思って電話を切ったものの、こうなりゃ集団からの追及が迫ってくるのは時間の問題だ。本作終盤にはそんな緊張感がヒシヒシと伝わってくる。

そして、今日はマーサを車に乗せて病院に送り届ける日。車に乗り込んだマーサはルーシーの運転で病院に向かったが、数日前には別荘の近くにパトリックの姿が・・・（もっとも、これは本物？それともマーサの幻想？）。これを見れば危険が迫っていることは確実だが、本作ラストに見る結末は少し意外。それをここで明かすわけにはいかないのであなたの目でしっかり鑑賞してもらいたいが、突如スクリーンが真っ暗になり、その後映画の終了を告げる字幕が流れはじめると、あれれ、こりゃ一体どうなっているの？あなたも、きっとそう考えるはずだ。しかして、あなたはこのラストをどう解釈？

２０１３（平成２５）年１月２１日記